連載68 在宅医療奮闘記

平成7年より在宅を開始した私の思い出

（医）東西会 千舟町クリニック院長
橋本 満義（65歳・内科）

ヘルパーさんの胸に抱かれて天国へ旅立った人生

7〜8年ほど前のことでした。M.Kさん（50歳代前半・男性）は、突然、人生の最期を迎えることとなったのです。それは衝撃的な出来事でした。

ある日、近所に住む知人であるという女性A子さんから、閉じこもりで寝たきり傾向のM.Kさんの訪問診療を依頼されました。A子さん（ヘルパー）から聞いた話では、M.Kさんは、衣料品の輸入会社を県外で成功させていたようです。しかし、アルコール性肝障害と腎障害で体力が著しく低下したため、会社経営もうまくいかなくなりました。結婚はしていましたが、子どもはいなかったので、奥さまと離婚され、松山へと帰ってこられたのだそうです。実家のある南予の身内とは絶縁状態にあり、地元へは帰っていないようでした。

さっそく、24時間365日の医療・看護・介護連携による医師の診察（訪問診療）、点滴注射（訪問看護）、入浴・家事サービス（訪問看護）を開始しました。その後、日々元気になっていきましたが、初診から1〜2カ月後、検査で肝臓がんと診断され、黄疸（おうだん）もみられるようになり、予後3〜6カ月の看取り状態であると思われました。

私は、M.Kさんの承諾を得て、人にはそれぞれ事情があるでしょうが、ご家族に連絡させていただき、病状を説明しました。すると、ご両親がすぐに松山までやって来て、M.Kさんと涙の対面となったのでした。そして「本家の墓に入ってもいいよ」と言ってくださり、周囲の者は胸を撫（な）で下ろしたのでした。

それからは、屋内で転倒したり、食事ができず脱水症になったりして、完全な寝たきりの状態になりました。しばらくして、夜間に部屋にいないと連絡が入りました。手分けして近所を探したところ、M.Kさんは道に倒れていました。普段、起き上がれず、歩けないはずの患者さんも、夜間せん妄時には、思わぬ力が出るようです。その後、傾眠（けいみん）状態となり、最後の往診依頼があったのは、数日後でした。

最後の往診時、A子さんはM.Kさんを抱き一生懸命呼びかけていました。その様子は、まるでヘルパーさんの胸に抱かれて天国へ旅立つことができ、幸せそうだと思える光景でした。そして数時間後、私たちは、M.Kさんを乗せて故郷へと帰る車を見送ったのでした。　合掌

人間のしぐさはいろいろですが、憂いや悲しみの感情は、故郷が求心力のごとく引きつけるかのようです。また、楽しみや幸せの感情は、周囲に拡散し、故郷から離れていくのでしょう。

在宅医療業務の立つ位置は、まるで人生の交差点のようです。

「お医者さんが来てくれる」
24時間・365日態勢で対応（松山市全域）
私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。

医師数 19名
（常勤6名、非常勤13名）
内科・外科専門医 16名
（国立がんセンター勤務歴有3名）
精神科専門医 2名
麻酔科専門医 1名
（ペインクリニック科）
末期がん治療（緩和ケア）相談室開設！

Hyper Blood Viscosity（高血液粘度群）を科学する
臨床生命科学（体質・病態学、栄養学）研究所開設
機能強化型・有床 在宅療養支援診療所
（医）東西会 千舟町クリニック
松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788
http://www.touzaikai.jp/